

ルーマニアの民族衣装と、そのギャザーについて

Romanian Folk Costumes and Gathers

川口素子

KAWAGUCHI, Motoko

1 はじめに

今回取り上げるテーマは、ルーマニアの民族衣装と、ギャザーとの関わりに就いてである。

ルーマニアの民族衣装を尋ねてブコビナ地方、マラムレッシュ地方、トランシルバニア地方を再訪しているうちに、次のような2つの疑問を抱いた。

1つはこの地方のブラウスが、一般にはギャザーを寄せるのが難しいと考えられている厚地布に、ギャザーを寄せている。ではそのギャザーはどのような方法で寄せているのかである。もう1つはマラムレッシュ地方のブラウスに見られる、ギャザーに似た技法はなにかということであった。

どの国においても民族衣装というものは、その国の地方独特の産物とともに、政治的・経済的インパクトによって培われてきた民族の精神性が反映されている。

ルーマニアは、ギリシャ正教という宗教的背景、中世ヨーロッパの雰囲気醸成森林地帯、寒い冬といった、明るい西ヨーロッパとは対極にあるようなイメージを持っている。

やや陰鬱な表情を見せる黒い装い、それに対比するかのよう、ビーズや刺繍などを施した色鮮やかな衣装、しかしこれらに共通するのはギャザーを用いた緻密な刺繍である。

ブコビナ地方やマラムレッシュ地方、トランシルバニア地方に、こうした独特の民族衣装が残っている背景には、地勢的条件（カラパート山脈と多くの河川による交通の不便）によって、周辺からの文化の移入が制限されたことや、「ルーマニアでは、特に農村の女性など、迷信もあって自分の土地から一歩も外へ出ない時代が歴史はじまって以来、綿々と続いていた。」^(註1)と

古くから言い伝えられてきたように、その地方に居住していた各種族が、出自を守り、固有の伝統文化を堅持してきたことが考えられる。

私たちにとって馴染みがあるようで、よく分からないのがルーマニアである。そこで本題に入る前にルーマニアの歴史と風土、自然を簡単に述べてみる。

なお、文中の語釈は*印で巻末に示した。

2 歴史と地形と気候

2-1 ルーマニア略史

ルーマニアの歴史は古く、しかも周辺大国の政治ゲームに長い間翻弄され続けてきた。紀元前6世紀にはトラキア人の一種族であるゲト・ダキア人が現在のドブロジャ地方に住んでいたことが、ギリシャの歴史家、ヘロドトスによって述べられている。このゲト・ダキア人国家（カラパート山脈周辺地域とバルカン半島北部一帯）は、紀元106年、ローマ帝国・トラヤヌス帝によって征服され、以降ローマ帝国の属州となった。

現在のルーマニア人の祖先であるダキア系ローマ人は、6世紀ごろまでに形成されてきたと考えられている。現地語表記の「ROMANIA」（ロマニア）の国名が、自らのルーツを語っている。しかしローマ帝国の属州となったゲト・ダキア人国家は、3世紀に西ゴート族により滅亡してしまい、以後4世紀から14世紀のワラキア王国、モルドバ独立公国の登場まで、ルーマニアは文献に登場することもなく、歴史的には忘れ去られた状態であった。

一方、トランシルバニアは9世紀にハンガリー人（マジャール人）が定住し、13世紀ごろにはハンガリー王朝に征服され、第1次世界大戦後まで、ハンガリー、オ

ーストリアの政治的・文化的支配下にあった。この地方にハンガリー、ドイツ系住民が多いのは、こうした事情からだ。

ルーマニアが名実ともに独立国家となったのは、1877年の露土戦争（ロシアとトルコの間で戦われた戦争）の際にトルコから独立宣言をしてからである。

第1次世界大戦では、ルーマニアは協商国側に立って参戦し、トランシルバニアをハンガリーから、ドブロジャをブルガリアから獲得し、大ルーマニアの夢を実現した。その後1940年代には第2次世界大戦勃発とともにドイツ、イタリアと結んだルーマニアは対ソ戦に参加。ドイツが敗色濃厚になると、ソ連と講和を結び、社会主義国家として進んだが、1991年のソ連崩壊に伴い、西側諸国の一員として歩んでいる。

2-2 地形と気候及び産業

ルーマニアは約24万km²（日本の約3分の2）で、その国土は山地（標高800m以上）、平野（200m以下）、その間をつなぐ丘陵、台地からなる。国土中央の東寄りに北から南に走る（東）カラパート（カラパチア）山脈は、国の中央部で大きく西に湾曲する。この西の部分を東カラパート山脈に対して、南カラパート（カラパチア）山脈と言い、トランシルバニア山脈とも言われる。

地域を大きく分けると南部の首都ブカレストがあるワラキア地方、中央部カラパート山脈に囲まれたトランシルバニア地方（図2）、東部モルドバ地方の3つに分けられる。

それらをさらに分けると、トランシルバニア地方の北をマラムレッシュ地方、西をバナット地方と言い、モルドバ地方の北をブコビナ地方、ワラキア地方の西をオルテニア地方と呼ぶ。またルーマニアの東、ドナウ



図1 ルーマニア全土

（研究した地域を中心に記してある）

川と黒海に面している所をドブロジャ地方と言い、この区分は、用途により使い分けられる。（図1）

気候は全体として大陸性気候で、南西部には地中海性気候の影響も見られる。黒海沿岸や平野部の年平均気温は約11度C、山地の年平均気温は、約4度Cである。

天然資源は豊富で、天然ガス、鉄鉱石、石油といった資源に恵まれている。国土の4分の1を占める森林資源も豊富だ。さらにドナウ川流域に広がるワラキア平原では、小麦、大麦、ジャガイモ、トウモロコシなどが栽培されている。ここで取り上げているブコビナ、トランシルバニア、マラムレッシュ地方は、主に半農半牧である。

図2 トランシルバニア地方（3月）



3 ルーマニアの女性衣装の精神性と特徴

3-1 衣装に秘められた精神性

C. D. ゼレティン博士は、アレクサンドリナ・エナケスク・カンテミール女史との共著『ルーマニア民族衣装集』^(註2)の中で、次のように述べている。

「今日、わが国の山岳地帯に住む人々が着用しているのは、あのダキア人の衣装にほかならないが、われわれの祖先は、この衣装を単なる衣服としてでなく、一種の紋章のしるしとして厳かに身にまとった。こうした衣装は、国民がこうむってきた試練と多くの苦難を乗り越えて生き延びてきた」。さらにゼレティン博士は、長かった混乱の時期を通して「自らの民族衣装を受け継ごうという欲求が大変強かった」と、ルーマニア人の魂を、そこに見出している。

3-2 女性衣装の構成

ルーマニア女性衣装の構成は、白色のブラウス(「5 ルーマニアのブラウスの特徴」を参照)にスカート、それに幅広の帯を締める。その上にベストを着け、頭にはスカーフ、足には革製の靴^(註1)を穿くのが、特徴的な女性衣装の構成である。また寒い季節にはコートを着ける。

フスタ (スカート)

フスタ(Fustă)とよばれるスカートは、ギャザースカート、プリーツスカート、ラップド(巻き)スカート、オーバースカートに区別される。

ギャザースカートとプリーツスカートは膝丈、セミロング丈、ロング丈のものがある。ラップドスカートはセミロング丈とロング丈である。オーバースカートは、スカートの上に重ねて着け、エプロン(分類はスカートである)状のものと、プリーツした巻きスカートに区別される。このオーバースカートは、スカートの前後に各1枚着けるものと、前だけ1枚の場合がある。

羊毛や木綿を用いて平織り、紋織り、綾織りで織られ、布も厚さも様々である。地域によって、縞、菱形、花模様などを豊富な色づかいで織り込んである。

例えばオーバースカートを用いるマラムレッシュ地方のエプロンは、カーペットかと思ふばかりの厚地の縞柄で、これらは下に穿いたスカートの裾がわずかに見えるように、またエプロンをつけた横の隙間からスカートが見えるように、装着する。このエプロンが用いられてきた背景には、遊牧民族でもあったマジヤール人(ハンガリー人)の影響があると言われ、騎乗する際の利便性のほか、農作業や家畜の世話をす

に、エプロンの裾をウエスト部分に挟みこむことで、作業の能率向上を図ったものである。

またオルテニア地方(首都ブカレストがあるワラキア地方の西方)でみられるスカートは、トルコからの影響と考えられるメタル刺繍をふんだんに使ったプリーツスカートで、重厚なものである。

これらのスカートの上には、シルクやウール素材で手織りされた幅5cm前後の扁平な腰紐ブラウ(Brâu)を締める。

ベストまたはピエプタル(ベスト)

ブラウスの上には、ウエスト丈または腰丈のベスト(Vestă)またはピエプタル(Pieptar)と呼ばれるベストを着ける。ベストは羊毛皮(羊毛が内側になる)に羊革でアップリケしたものや羊革でアップリケした上に毛糸で花柄模様を刺繍したもの、また花柄刺繍を施したベルベット地を、羊毛皮(図3^{*14})に合わせたものがある。



図3 花柄刺繍を施した羊毛皮のベスト

さらに寒い時期になるとコート^(註2)を着ける。ラシヤ地やフェルト地、羊革などに、抽象的な模様や花柄を毛糸やコードなどで刺繍したものである。

トランシルバニア山脈(南カラパート山脈)から北の地域では、夏でもこうしたベストを着けた人に出会う。その理由は、平均気温が低いために厚着の習慣があることも関係しているのではないかと考えられる。(図17)

シャール・デ・ルナ(スカーフ)

頭に着けるシャール・デ・ルナ(Șal de Lână)とよばれる正方形のスカーフは、年間を通してルーマニア全地域で祭り、礼拝のほか、日常でもよく用いられる。素

材の多くは羊毛地で、花柄の刺繍を施したもののやプリント地がある。また、白地の麻や木綿地の長方形のスカーフを使用する地域(南部のオルテニア地方など)もある。そのほかに被りものとして、ビーズの頭飾り^(※10)や刺繍帽を着ける地域(マラムレッシュの南、ピストリッツァ県など)もある。

4 ルーマニアで用いられるギャザー

4-1 ギャザーの目的

一般に服飾に用いるギャザー (Gather) またはギャザリング (Gathering) とは、布地に手縫いでランニングステッチしたものを縫い縮めること、または上糸を弛めて粗くミシンステッチし、その下糸を引き締めて布地を縮め、皺をつくる作業を言う。

ギャザーは、袖山、首回り、カフスまたウエスト部分などに素材の余剰分をギャザーにすることで、体形に合わせた衣服の造形を目的とした、もっとも単純であり、また簡便な技法である。

また着装上の快適さ、保温性などの機能・効果を持ち、しかもギャザーすることでできる膨らみが柔らかみを表現し、そこから生まれる美しい陰影効果も併せ持つ。

ギャザーは、全体にほぼ均等に入れるオールギャザー (All Gather) と、部分的に入れるクラスターギャザー (Cluster Gather) に分けられ、それらをより装飾的にしたものがスモッキング (Smocking) やシャーリング (Shirring) といわれる技法である。^(註3)

ギャザーに必要とされる用尺は、ギャザリング幅の2倍以上の布を必要とし、布地は厚地でないことが、作業の簡易さに加えて、美しく仕上がる条件とされてきた。

ここでルーマニア各地方に伝承されている民族衣装のブラウスを取り上げ、そこに多く用いられているギャザーについて考察してみる。

4-2 カマーシャ(ブラウス)、素材と織り

ルーマニアでブラウスのことをカマーシャ (Cămașă) という。カマーシャに用いる布は19世紀初めまで亜麻や大麻を用いて制作されていたが、その後、綿が輸入されると木綿や木綿に亜麻、木綿に大麻の混紡を用いるようになる。

たとえばトランシルバニア地方のシック村やマラムレッシュ地方、ブコビナ地方のカマーシャの布地は、厚地の手織り布である。それぞれの家庭で糸を紡ぎ、織られる。

トランシルバニア地方メラ村のカマーシャの布地は、ハンガリーから輸入した機械織りの布である。(ともに

用いられるベストやスカートのリボンやビーズなどもチェコやフランスからの輸入品を用いているという^(註4)。

5 各地方のブラウス (カマーシャ) の解析

カマーシャ (Cămașă) はルーマニア全域で用いられるブラウスの総称である。地域によりブコビナ地方ではイーネ (ie)、シック村ではカマーシャ・ウングレイシャ (Cămașă Ungurească)、メラ村ではカマーシャ・ロツンダ (Cămașă Rotundă) などとも呼ばれている。

ルーマニアの特徴でもあるギャザーを用いたブラウス、カマーシャ (以後名称をブラウスに統一) の形態は、2つのタイプに分けられる。1つはゆったりと身幅のある腰丈のアンダーブラウス、もう1つはワンピース丈のもので、上にラップド (巻き) スカートを着けるものである。

それらの素材は白地の大麻、亜麻、木綿、または木綿と麻の混紡である。

上に羽織るベストやコートには、抽象柄や、花模様のフラットステッチ^(※3) 刺繍が多いのに対して、ブラウスには、ルーマニアの特徴ともいえる区限刺繍^(※4) を用いている。模様の多くは幾何学模様である。しかし一部の地域では花や鳥の図柄もみられる。また別にドロネットワークや、カットワークなどの技法も見られる。

手織り布を使用するブコビナ地方、トランシルバニア・クルージュのシック村、マラムレッシュ地方の織り幅は50~60cmで、その人の着丈で用尺を決定し、1枚分ずつ織られる。織りから作品の完成まで一貫して自家制作される。

こうした布地にギャザーを施すには、4-1で述べた方法では上手く寄せることは不可能である。それを可能としたのがセッティング・イン・ギャザーズ (Setting in Gathers 図7) の方法や、インクレティツラ (Încrėtițură 図28) 技法である。

しかしこのような特殊とも言える技法は、いまなお、日常的に各家庭で行われているとはいえない。その理由として、制作するに、時間と根気を要することのほか、とくに最近の現象として、冬季間、作り手である女性達が近隣の国や町 (ハンガリーのプダペストなど) に出稼ぎに出てしまい、世代間の技術の伝承が希薄になってきたことが考えられる。

機械織り布を使用しているトランシルバニア・クルージュのメラ村は、薄地木綿布 (ここでの薄地布とはブロード程度のものをいう) をたっぷりと使い、十分にゆとりをつけた身頃や袖を、ギャザーやスモッキングの技法で縮め、さらにその上にタックを併用して、全体を普通の幅まで畳むという技法を用いたものである。

刺繍を施したブラウスは自家制作される。

織物の組織は、一部に縞織物や紋織物も見受けられるが、多くは平織りの無地織物である。この織りは、布目が拾い易く伝統的な刺繍にも適したものと言える。

ブラウスの構造は首回りやアームホールなどにカーブのない直線裁断である。

つぎに各地方や村の衣装の特徴や構成、ギヤザーを含むブラウスの制作について解析してみる。また地方の特殊な刺繍技法についても巻末に入れてみた。

地方名だけで、村名を明記していないのは、その地域一帯に広く分布し、特定できないことによる。

5-1 トランシルバニア地方クルージュ県シック村 (Transilvania Cluj Sic)

シック村は、トランシルバニアの中心都市クルージュ・ナボカの東北に位置している。かつてはハンガリー領でもあったこの村は、ハンガリー系の人が多く住む。婚礼、葬儀、祭りのほか日曜礼拝にも民族衣装を着用する地域である。日常とくに冬場は刺繍に精を出し、ブカレストやハンガリーのブダペストなどに土産物として出して生活費の一部にあてる。



図4 シック村（民族衣装を纏った人々。8月）

またこの地方は、白色の麻地や木綿地の手織り布に赤色毛糸を用いた刺繍を施し、ピローケースや窓飾り、またテーブルセンターなどとして用いている。刺繍はイラショシュ^(※6)と言われるクローズド・スクエア・チェーンステッチで刺されるもので、一部にはトロッコークロスステッチ^(註6 ※7)を入れる場合もある。赤やグリーン、白色で手織りした飾り布^(※8)などで室内を飾る村としても知られている。(図4)



図5 シック村の婚礼衣装

衣装の構成一頭には黒色地に赤色花柄の刺繍スカーフ(Șal de Lână)、ブラウスの上は、紺色のラシャ地、または黒色の革のベスト(Vestă)を着け、下はアコーディオンブリーツのロングスカート(Plisată)を穿く。スカートは黒色または赤色を基調とした、プリントした小花模様である。この衣装はイースターを始めとしたキリスト教に関する祭りに用いる。(図5)



図6 シック村のブラウス

ブラウスの特徴—この地方では、カマーシャとも(Cămașă)またはカマーシャ・ウングレイシャ

(Cămașă Ungurească) ともいい、ハンガリー式ブラウスのことである。

白色の手織り木綿地を用い、たっぷりとゆとりをもたせた袖に、横に数本のプリーツを畳み込み、着装時に膨らませて、バルーンを形成する。

プリーツによって得られる美しい陰影が特徴である。ネックラインにギャザーを施すことで、身頃にゆとりと緩やかな線を作っている。(図6)

制作—裁断した各部分を、オープンワーク・シーム技法^(註7*9)で接ぎ、ネックラインや袖口にセッティング・イン・ギャザーズ(図7^{註7})の技法を用いて作品に構成する。

構成した作品に濃い目の糊を効かせ、片袖を平らに置き、重なったままの状態、アイロンで横プリーツを畳んでいく。横プリーツの襞幅寸法、本数の決まりはない。ネックラインのパイピング部分はロックステッチ^(註8*11)技法を用いて装飾する。

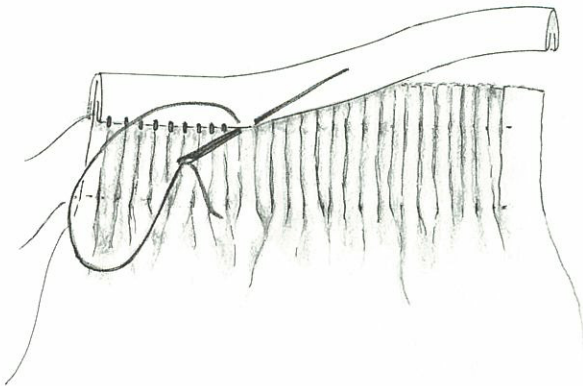


図7 セッティング・イン・ギャザーズ
(Setting in Gathers)

ギャザーする個所から少し下がった所にランニングステッチ(Running Stitch)をし、ストローキング・ザ・ギャザーズ技法(図8)を用いてひと襞ずつ襞を寄せ、縦まつりしながらギャザーする個所に固定していく方法である。

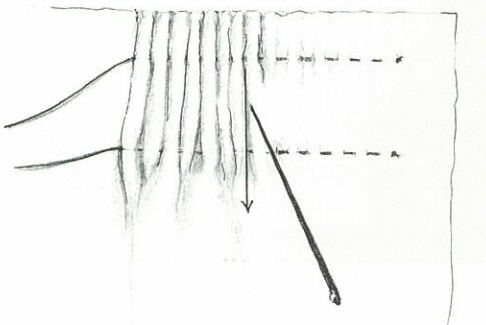


図8 ストローキング・ザ・ギャザーズ
(Stroking the Gathers)

厚地の布や目の詰んだ布など襞の立てにくい布に用いる方法で、ランニングステッチし、針を使って襞の溝に沿って撫で下ろし、布を寄せて襞を作る方法である。

解析—ギャザーを施すには、下縫いした糸を縮める作業が必要であるため、薄地や柔らかな布が条件とされている。

しかし、ここで注目したい点は、用いている粗布(経緯に木綿の太番手で織った平織り布)にギャザーを施している点である。

袖を例に見ると、袖幅80cmを、袖口で18cmにまで縮めている。縮め率は約4.4倍である。

この織り目の詰んだ張りのある厚地布に、上述した方法でギャザーを構成するのは、とうてい不可能である。それを可能としたのが襞を寄せながら止めつけるセッティング・イン・ギャザーズである。

この方法は、こうしたギャザーを可能にするばかりか、ギャザーの作業と同時にその個所に固定できる利点も兼ね備えている。つまりネックラインや袖口に施されるギャザーと、約0.7cm幅のパイピングも同時に制作できるのである。

5-2 トランシルバニア地方クルージュ県メラ村 (Transilvania Cluj Mara)

メラ村は、中心都市クルージュ・ナポカの東方に位置し、ハンガリー系の人々が多く住む。ここはビーズを取り入れた美しい民族衣装を着用する地域としてだけでなく、赤系の花模様を家具や飾り皿にペインティングし、刺繍したピローケース、壁飾り布、テーブルセンターなどで室内を華やかに飾る地域としても知られている。また衣装ばかりでなくイースターエッグにもビーズを施している。(図9)

衣装の構成—頭にはビーズや模造真珠で作られた冠状の飾りマルジュレ(Măgele^{*10})を着け、ゆたかなプリーツを配したブラウス、カマーシャ・ロツンダ(Cămașă Rotundă)の上には贅沢にビーズを施したベスト(Vestă)を着ける。下には裾部分にジャガード織りの花柄テープをあしらった丈の長いプリーツスカート(Fustă Plisată)を穿き、そのスカートの上に、同じ丈のビーズ刺繍を施した、飾りプリーツエプロン(Șorț Plisată)を着ける。

これらは婚約式、婚礼、イースターを始めと

したキリスト教に関係する祭りに用いる。メラ村の衣装は、ルーマニアの中でも最も煌びやかで美しい衣装である。(図10)



図9 メラ村 (花柄をペインティングした室内)

ブラウスの特徴—この地方ではカマーシャまたはカマーシャ・ロツンダ(Cămașă Rotundă)ともいい、膨らんだブラウスという意味である。ブルー色のブロード地を用い、たっぷりとゆとりをつけた身頃や袖に、カフスやカラー、袖付けや腋綴じに赤色毛糸を用いてアクセントをつけている。身頃や袖にギャザーや縦プリーツをとることで重厚な華やかさが表現され、このブラウスと共に用いる豪華な衣装と、よく調和したものになっている。(図11)

制作—機械織りした、ブルー色のブロード地を用い、まず袖山になる位置及びカフスの付く位置に、それぞれギャザーで引き締め、スモッキングの技法の1つであるウェーブステッチ(6-2スモッキングの項参照)を用いて、ギャザーを固定する。カフスを付け、そのカフスにローズ・クロスステッチ(註6*12)を施す。袖付け、腋接ぎは、布端を1cmほど織り込み、双方を突き合わせ、赤色毛糸を用いて、約3.5cm幅のルーマニアン

ステッチ(図13*5)で接ぐ。最後に、ネックラインに寄せたギャザーを引き締め、スモッキングで固定させた後、スタンドカラーをつける。カラーは袖口と同様にローズ・クロスステッチを施す。

メラ村の特徴でもある、袖山から袖口までの縦プリーツ、マッシュルームプリーツ(図12)は作品完成後にアイロンで畳む。



図10 メラ村の衣装

解析—曲線的な流れをもつギャザーと、それと対比する直線的なプリーツの組み合わせである。

袖のギャザーを観察すると、袖幅は160cmの横地を用いている。袖山から袖口までの袖幅は均一である。その160cmもの袖幅を、袖口で22.5cmまで縮めている。特別薄い生地ならともかく、ここで用いているブロード程度の布地では、冒頭で述べたギャザー方法で縮めるのは不可能である。

ここでギャザーを可能にしたのは、まず1cm間隔(襷奥約1cm)の粗いランニングステッチ

で縮めたことである。しかしそこで構成されたのは、ギャザーの厚みと不安定な襞の乱れである。この不安定な襞を固定させたのが、スモッキングの技法である。しかもこの技法は、カフスに刺繍したローズ・クロスステッチ^(※12)から、ギャザー袖につながる段差を無くし、さらに装飾としての効果をもたせている。



図11 メラ村のブラウス

また、各部分の接ぎに赤色毛糸でルーマニアンステッチを用いることで、接ぎの役割と、装飾としてのアクセントをつけ、また完成後に畳まれた襞奥の深いマッシュルームプリーツ（図12）の優雅な雰囲気は、共に着装するビーズ刺繍を施したプリーツスカートやベストとよく調和したものになっている。



図13 ルーマニアンステッチ
(Rumanian Stitch) (袖下から脇部分^{※5})

長めに渡した糸の中心を、やや斜めまたは直角に止める技法である。



図12 マッシュルームプリーツ
(Mushroom Plaits)

きのこの傘の、裏襞のように見える細かなプリーツのことをいう。

5-3 ブコビナ地方 (Bucovina)

ブコビナ地方はウクライナとモルドバ共和国に国境を接する。また、ルーマニア人とウクライナ人の住む地域でもある。年の半分は冬であると例えられるような気候風土のなかで、辛抱強く素朴に生きる人々からは、ブラウスに施された緻密な刺繍にも見ることができる。そこで使われる色彩は、ウクライナと大変似かよった傾向が見られる。(図14)

衣装の構成一頭に花柄のスカーフを着け、白地のブラウスにセミロング丈の巻きスカート、カツウリンツァ (Catrință) を穿き、幅広の腰紐ブラウ (Brâu) を着ける。衣装の上には羊革のベスト、ベスタ (Vestă) あるいはコート・グバ (Gubă) を着ける。これらは、手織りを含めてすべて自家製である。婚礼、祭り、葬儀、イースターを始めたキリスト教に関する祭りに用いる。(図15)



図14 ブロビナ地方 (2月)

ブラウスの特徴—この地方の呼び名でイーネ(ie)またはカマーシャともいう。白色の厚地木綿布に、この地方独特の色彩である黒、グレー、黄色の木綿刺繍糸を用いて、幾何学模様を区限刺繍してある。袖山や袖口には他の地域に見られるようなギャザーを用いず、首回りだけに粗くステッチ



図15 ブロビナ地方の衣装

した、糸を着装時に引き締めてギャザーを作る、最も安易な方法を用いている。しかし、糸の引き加減を自由にできるというものの、その加減でスタイルを大きく変えることはない。(図16)



図16 ブロビナ地方のブラウス

またもう1つのスタイルとして白地の、やや薄地で木綿地のワンピース型(分類はブラウスになる)がある。使用目的は同じであるが、袖、肩、裾部分に非常に繊細なドロンワークを施し、襟や胸元には、絹糸を用いて区限刺繍したものである。裾部に施されたドロンワークが見えるように、巻きスカートを着ける。

制作—区限刺繍をし、作品に仕上げた後、首回りにアブローダー12番程度の糸2本を用いて、1cm間隔の粗さでランニングステッチする。着装時にその糸を引き締めてギャザーを作る。

解析—ネックラインにできる大きなギャザーは、ランニングステッチの目を粗くした理由であり、これは扱う布地が厚いことが考えられる。

ギャザーを施した部分をさらに観察すると、ランニングステッチした部分には刺繍が省かれている。仮にその部分まで刺繍を施すと、さらに布地に厚みが増し、この粗いギャザーすら構成することが難しくなる。ギャザーを構成できるランニングステッチの間隔は布地の厚さから考えられたものであろう。

ここで使用する手織り平織り布は、経緯がほぼ均一で、区限刺繍をする上で図の構成がし易く、またしっかり織られた布地は刺繍糸の引き加減による布地のつれ、ゆがみが生じないものである。

身頃幅、袖幅を観察すると、他の地域より袖幅が狭く、デザインもシンプルである。

それはギャザーやプリーツなどで表現するより、刺繍に重点をおいているからではないかと考える。



図17 マラムレッシュ地方

(羊毛皮のベストを着けて教会に向かう婦人。8月)

5-4 マラムレッシュ地方 (Maramures)

マラムレッシュ地方は、ハンガリー、ウクライナと国境を接し、トランシルバニア地方の北に位置する。

「羊と樅はマラムレッシュの古くからの象徴である。羊は衣食住の衣と食、とりわけ衣の分野を主につかさどる。また、麻、木綿も衣の大事な要素である。女たちは食事、育児、洗濯、耕作のほかに年がら年中、羊毛とかかわり合う。刈る、梳く、紡ぐ、染める、織る、の全工程に携わる」。また「マラムレッシュはヨーロッパ農民文化のひな型で、フォークロアの一大宝庫、生きた民族博物館だとルーマニア内外の、この土地を知る人は口を揃えていう」と、みやこうせい氏はその著書『マラムレッシュ』の中で語っている^(註1)。

普段でも民族衣装を着用する地域である。(図17)

衣装の構成一頭には花柄プリントのスカーフを着け、白地のブラウスに膝丈または膝が隠れる程度のスカートを着ける。スカートは2つの形態があり1つは村ごとに異なる。花柄プリントのギャザースカート、もう1つは黒色無地または花柄プリントのスカートの上に、ザディエ(Zadie^{*13})というエプロン状のものを着ける。ザディエは前後1枚ずつ着ける場合と前だけの場合がある。これらの上に刺繍を施した羊毛皮のベスト(Vestă^{*14})を着ける。

こうした衣装は婚礼、葬儀、イースターを始めとしたキリスト教に関係する祭りにも用いる。(図18)

ブラウスの特徴—白色の木綿地を用い、胸回り、肩、袖口部分にアイレット刺繍^(註5 *15)やスカラップステッチを施し、さらにインクレティツラ技法をいれて、柔らかなギャザーを構成させている。

(図19)



図18 マラムレッシュ地方の衣装



図19 マラムレッシュ地方のブラウス

袖口の部分にボーダー刺繍(図20*16)で全体にアクセントを付けている。



図20 各技法を入れた袖口部分

制作—白色の麻布または手織り木綿布を、着装する人の必要な用尺で手織りする。手織りした厚地布を各部分に裁断し、白色木綿糸を用いて、胸元、肩、袖口、身頃両サイドの接ぎの部分に、アイレット刺繍やスカラップステッチした後、イン

クレティツラ刺繍を施す。さらに袖口部分に多色糸を用いてボーダー刺繍^(※16)をし、これらを作品に組み立てる。

解析—インクレティツラ技法で、胸幅約48cmを20cmに、袖口幅約73cmを24cmに、袖山約73cmを30cmまでに縮めている。厚地布に細かなギャザーを寄せることを可能にする技法である。

また見方を変えれば、この細かなギャザーとともに、縫い締めによる複雑で美しい皺を作り出すインクレティツラ技法は、こうした厚地布でなければ構成されないのである。

ともに扱われているアイレット刺繍は、この厚地布の利点を生かしアイレットの陰影をより鮮明にしている。

袖口の部分(図20)はインクレティツラ技法を行うことで襷が構成され、ボーダー刺繍にも適したものである。

6 ギャザーの技法及び特徴

ギャザーから装飾的に変化した、シャーリング、スモッキング、裏スモッキング、それにインクレティツラ技法を加えた、それぞれの特徴を比較してみる。

6-1 シャーリング(Shirring)

材料 布地—薄地や柔らかな布(オーガンディー、ジョーゼット、デシン、羽二重等)

糸—布地と同色の羽二重糸、25番刺繍糸2本取り程度のもの。

技法 ランニングステッチまたはミシンで縫い縮めたもの。(図21~23)

ギャザーから装飾的に変化したもので、薄地を用いて2本以上のランニングステッチを縫い縮めて、美しい柔らかな陰影を作り出し、糸の引き加減でギャザーの変化を見るものである。

シャーリングは花柄などの自由な図柄でも制作するが、今回の研究に近いストレートな線を縫い縮めるもの(図21)、ジグザグ線やカーブ線を縫い縮めるもの(図22)、またはピンタックするようにつまみ、折り山のすぐ際を縫い縮めるもの(図23)を取り上げてみた。この3技法は同じランニングステッチであっても段数、間隔、上下移動で形態が変わる。例えば、図21の数本の段数を詰めたステッチからは、美しい皺とその周囲に繊細なギャザーが構成され、図22のようにカーブや

ジグザグにステッチしたものには、摘んだような立体模様が構成される。また図23の間隔を開けたステッチの間には、立体的で柔らかなギャザーを見ることが出来る。

布の見積もりは、布地の性質、厚み、作品のデザインにより異なるが、通常、縫い縮め量として、3～4割ほど多く見積もる。

技法についての注意点は、ランニングの針目を大きくしないこと、厚地や張りの強い布地を用いないことである。

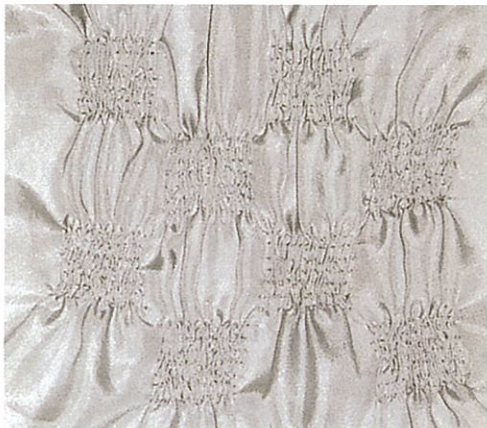


図21 ストレート線（羽二重）

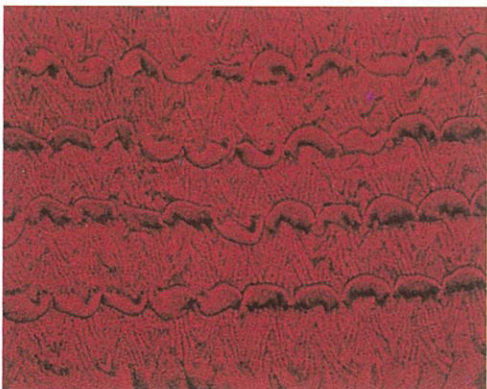


図22 ジグザグ線（シルクサテン）



図23 ピンタック（シルクオーガンディー）

6-2 スモッキング(Smocking)

材料 布地—無地、水玉、ギンガム、ローン、ピケなどの木綿地。ジョーゼット、デシン、サテンなどの絹地や化繊地、また薄手のウール地など。

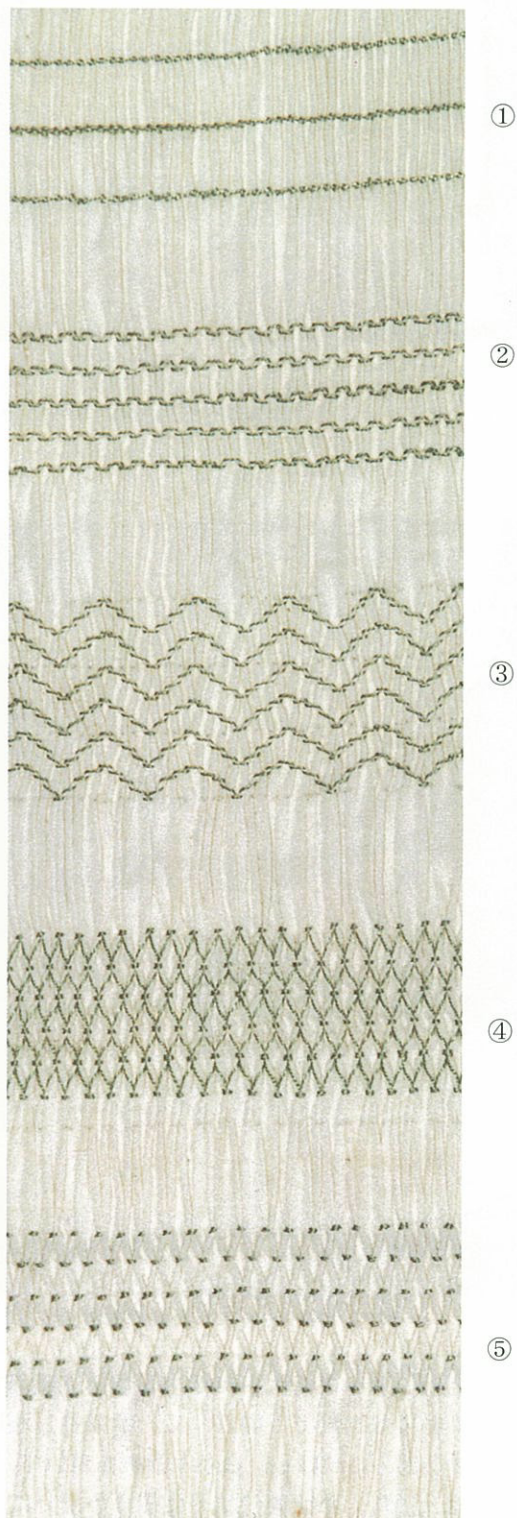


図24 スモッキング技法、各種

糸一下縫いとしてカタン糸または化繊糸30～50番程度のもの。

装飾糸として25番刺繍糸、5番刺繍糸、毛糸など。

技法 下縫いした糸を縮めた布に、次のような刺繍技法、①アウトラインステッチ (Outline Stitch)、②ケーブルステッチ (Cable Stitch)、③ウエーブステッチ (Wave Stitch)、④ダイヤモンドステッチまたはシェブロンステッチ (Diamond StitchまたはChevron Stitch)、⑤ハニコムステッチ (Honeycomb Stitch)、フェザーステッチ (Feather Stitch) 等で装飾する。(図24)

ギャザーを寄せた伸縮のある襷に刺繍技法を施すもので、布地の性質、ステッチの種類で変化する。

刺繍に入る下準備として、カタン糸または化繊糸30番～50番程度の糸を用いて、スモックする段数をダーニングステッチ (Darning Stitch) する。このダーニングステッチは同間隔、そして上段から下段まで縦列をそろえて掬う。その掬った数本の糸を同時に引き締めて縦襷を作る。

ダーニングステッチの間隔寸法が大きくなるほど襷は深く、そこに作られるギャザーの分量も多く、用いる布幅も多くなる。反対にダーニングステッチ間隔寸法が小さければ襷は浅く、ギャザーの分量も少なく、用いる布幅も少ない。

ダーニングステッチの間隔の大小を決めるには布地の厚さが関係し、厚地は襷間隔を広く、薄地の場合は狭くするのが一般的な考えである。

つぎに刺繍糸などを用いてスモック技法を施す。糸の種類、用いる本数は、布の性質、制作する作品により決められる。

スモック技法はステッチで装飾する役割のほか、伸縮性をもたせながら、襷を必要以上に伸ばさない役割も持っている。しかしステッチ自体に伸縮の違いがあるので、そのことを考慮に入れて制作する必要がある。一番伸びにくいのは図24にある、①のアウトラインステッチ、次に②のケーブルステッチ、④のダイヤモンドステッチと⑤のハニコムステッチが同程度であり、一番伸び易いのは③のウエーブステッチである。

しかし、これらの技法をどの程度用いるかでも違いがでる。つまり1～2段なのか、または数段刺すかである。段数を多く刺すほうが、1～2段のものより締まりが良く、襷を安定させる割合も大きい。

数段刺すことで、そのステッチの効果を生かすものに④のダイヤモンドステッチ、⑤のハニコムステッチ、③のウエーブステッチなどがある。

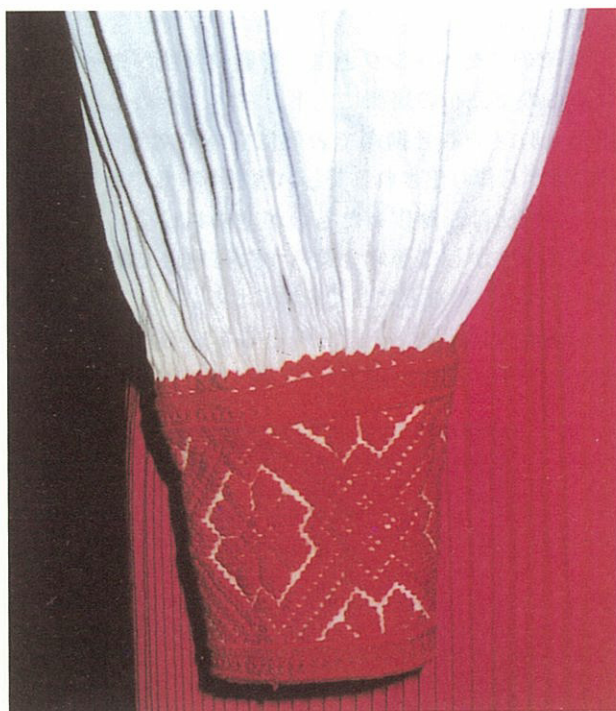


図25 ウエーブステッチを施した袖口部分
(「5-2 メラ村」の制作の項参照)

つぎに、ステッチの出来を大きく左右するのが、布地を掬う分量である。掬う分量が少な過ぎると、糸の遊びが少なくなり、スモッキングの持ち味でもあるゴム状の伸縮がなくなる。

掬う分量は布地により、例えばブロード地で0.25cmくらい、厚地では0.35～0.5cm程度である。

襷の間隔はブロード地程度のもので0.6～0.8cmくらいである。

必要とする布幅は、先に述べたように布地の厚さ、襷の間隔、技法また個人の手加減でも違いがあるが、木綿地の場合で出来上りスモックする幅の2.5～3倍、ローンなどのごく薄地は3～4倍、ウール地は2～2.5倍くらいが目安である。

*下準備のもう1つの方法として、縫い締め工程を省いて、必要な個所に直接印をつけ、ステッチを施す方法がある。これは北アメリカで用いたといわれる。^(註9)

6-3 裏スモッキング (North American Smocking)

材料 布地—ベルベット、サテン、シャンタン(図26)、ジョーゼット、デシンなどの絹地や化繊地また薄手のウール地、ベルベットなど。
糸—カタン糸、化繊糸の1本取り、または25番刺繍糸2本取り程度。

技法—布の裏側を摘み表側に襷を作る。(図26)

6-2のスモッキングとは、形態や技法がまったく異なるもので、布の裏側に上下、左右、斜めに規則的に印を入れ、それを摘んで表側に立体的な襷をつくる。その襷から作り出される美しい陰影が特徴である。

この技法は、制作したものが型崩れしないため、その利点を生かして薄地や柔らかな布地、また陰影がでるベルベット地などに多く用いられる。

立体的な襷と陰影を持ち味としているため、花柄のようなプリント地は効果が少ない。

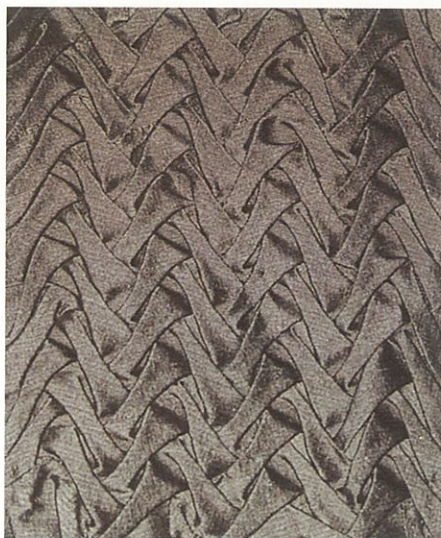


図26 シャンタン地

テッチする。変化をもった襷を構成するために、段ごとに揃う本数を変えたり、上下の段をずらして規則的に揃うことが必要である。この作業を5段同時進行し、10~15cmほど進める。そのダーニングした5本の糸を同時に引き締め、また同様の作業を繰り返す。



図27 アイレット刺繍と、インクレティツラ技法

6-4 インクレティツラ (Încretițură)

材料 布地—厚手の麻、木綿、または麻、綿の混紡糸—マクラメ糸 (※17)

技法—インクレティツラ技法(図27—29)

厚地麻布または木綿布に木綿太糸を用いて布を縫い縮めることで、小さな襷と美しい細かな皺を構成するものである。

刺し方は、緯(糸)を抜いた個所の経(糸)を揃ってランニングステッチし、その糸を引き締めて変化をもった規則的な襷を作る技法である。

インクレティツラの技法を、5段入れる例で解説すると(図28)、1段目の個所の緯を、ドロンワークをする要領で数本(1本あるいは3本)抜く。これをある間隔を空けて5段抜く。初めの1段目を、マクラメ糸を用いて、経を数本ずつ揃ってダーニングステッチする。他の4段も同様にス



図28 インクレティツラの技法

さらに上下3段ずつに、糸抜きをしないでランニングステッチを入れる。



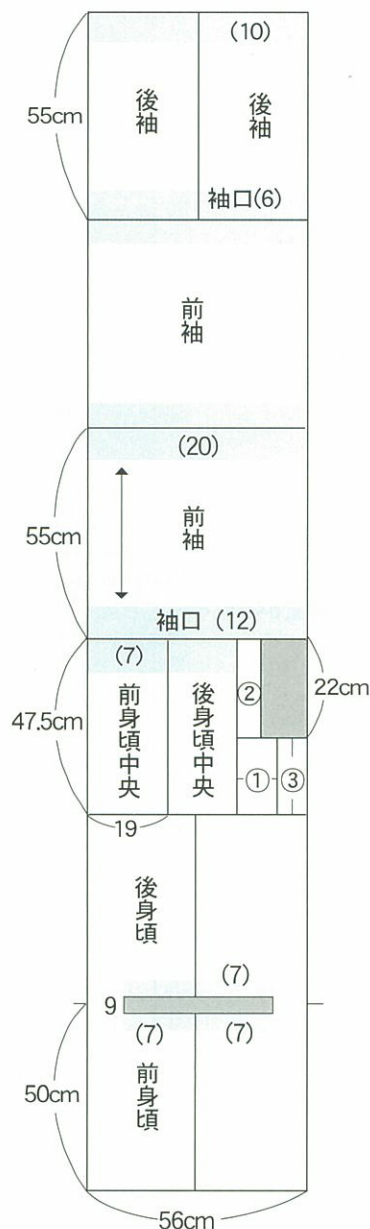
7 各地方のブラウスの、ギャザーの構成

ルーマニアのブラウスは、木綿又は麻地に、ギャザーを用いたもので、直線裁ちの構造である。

ギャザーで縮めた寸法は（ ）内に表示し、ギャザー位置は青色で示してある。縫い代は全て1cmである。

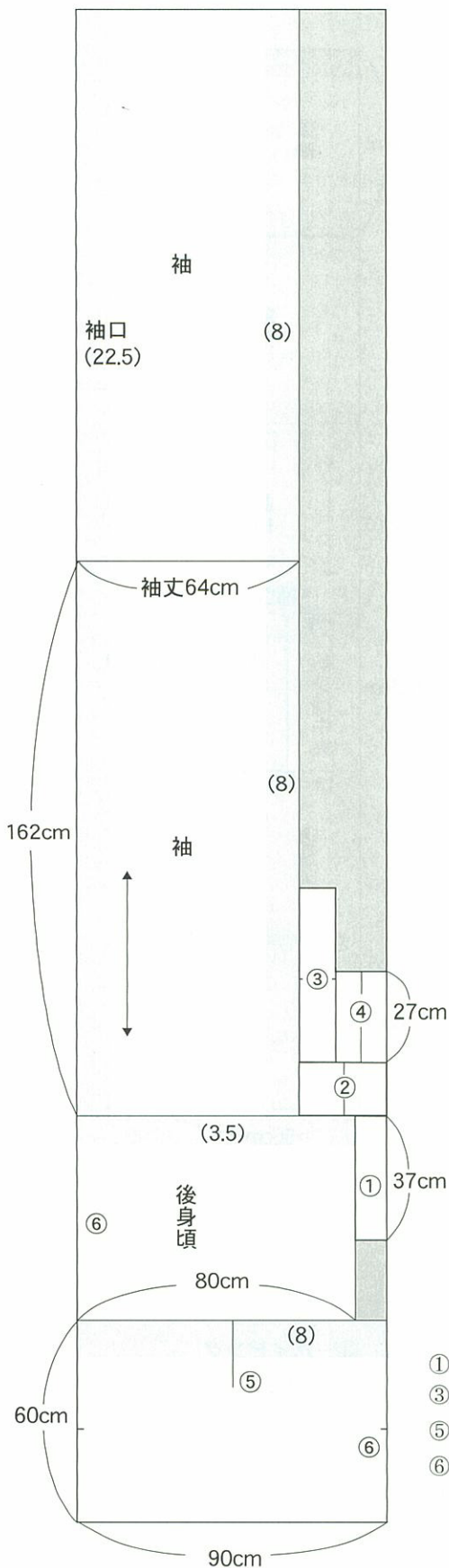
それぞれの用布は「7—2 各地域によるギャザーの扱い方」の試料の欄に示した。

図30 A シック村



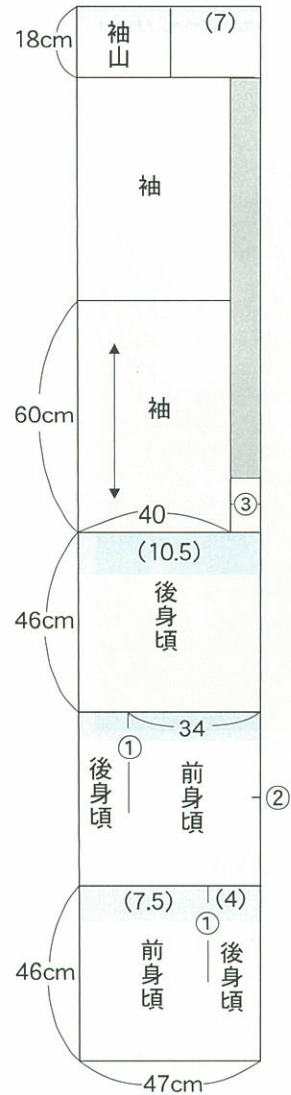
- ①-腋マチ
②-パイピング
 (ネック)
③-パイピング
 (袖口)

図31 B メラ村



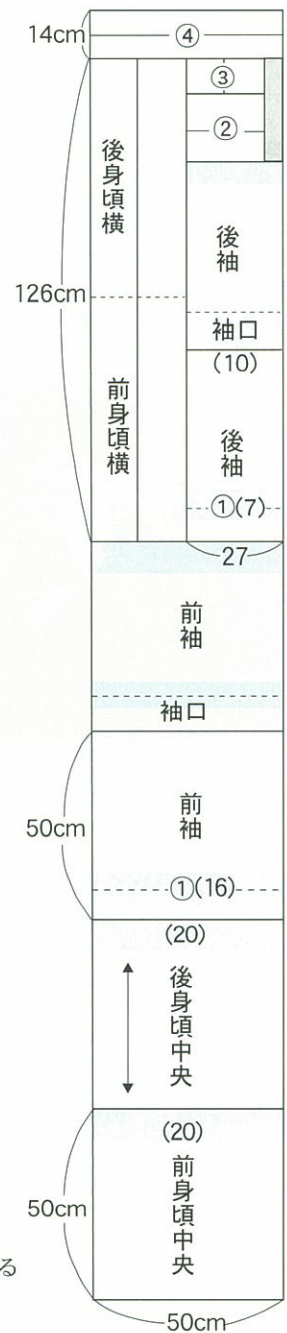
- ①-カラー ②-腋下マチ
③-カフス ④-腋布
⑤-オープンフロント位置(21cm)
⑥-マチ(腋)の合印

図32 C ブコビナ地方



- ①-袖付け位置
②-オープンフロント位置(22cm)
③-腋下マチ
*裾にブロード程度の別布(18cm)を付ける

図33 D マラムレッシュ地方



- ①-点線はギャザー位置
②-前、後身頃のヨーク
③-腋下マチ
④-ネック、両サイド布

*青色はギャザー部分
*()内は縮めた寸法をcmで表示

7-2 各地域によるギャザーの扱い方

A シック村 (図34. 35)

ギャザー方法—セッティング・イン・ギャザーズ
(Setting in Gathers 図7)



図34 袖口部分



図35 前身頃

首線りにロックステッチ（黒の部分^{*11}）、袖の接ぎ（黒線）にオープンワーク・シーム^(*)の技法を使用してある。

前、後身頃 縮め率 約2.42倍

（出来上り寸法 21cm 用いた布51cm）

袖山寸法 縮め率 約2.66倍

（出来上り寸法 30cm 用いた布80cm）

袖口寸法 縮め率 約4.44倍

（出来上り寸法 18cm 用いた布80cm）

試料—用布	56cm(幅) 312.5cm
素材	木綿
材質	木綿100%
組織	平織り(手織り)
目付	274 (g/m ²)
密度	経18 緯20 (本/cm)
厚さ	0.6 (mm)

B メラ村 (図36. 37)

ギャザー方法—スモッキング (Smocking 図24)

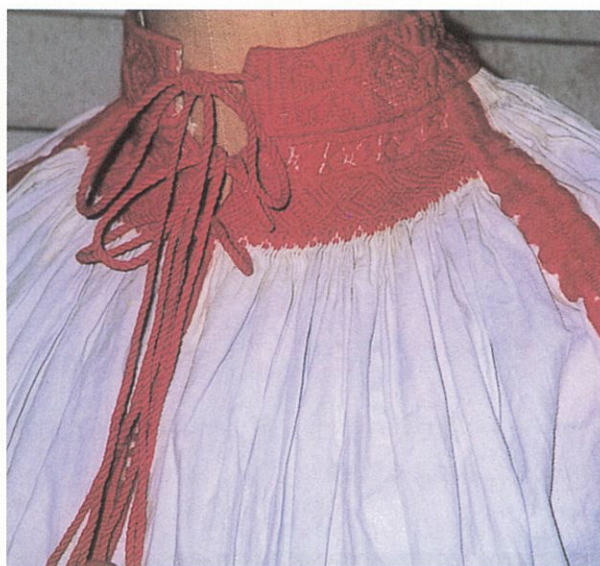


図36 前身頃



図37 後身頃

*カラー付け位置

前身頃 縮め率 約5.37倍
 (出来上り寸法 16cm 用いた布86cm)
 後身頃 縮め率 約22.2倍
 (出来上り寸法 3.5cm 用いた布78cm)
 袖 縮め率 約20.0倍
 (出来上り寸法 8cm 用いた布160cm)
 袖口寸法 縮め率 約7.11倍
 (出来上り寸法 22.5cm 用いた布160cm)
 袖の縦(マッシュルーム)プリーツ 28襞 (図12参照)
 襞奥 2.5~3cm (1襞布幅5~6cm)
 1プリーツにスモックの襞数 11±1

試料一用布 90cm(幅) 444cm
 素材 木綿
 材質 木綿100%
 組織 平織り(機械織り)
 目付 160 (g/m²)
 密度 経28 緯30 (本/cm)
 厚さ 0.33 (mm)

C ブコビナ地方 (図38)

ギャザー方法ーランニングステッチ(Running Stitch)した糸による引き締め



図38 前身頃

ネックライン(着装時) 縮め率 約3.3倍
 (着装寸法 約40cm 用いた布131cm)

試料一用布 47cm(幅) 276cm
 素材 木綿
 材質 木綿100%
 組織 平織り(手織り)
 目付 刺繍されているため計測不可能
 密度 経14 緯13 (本/cm)
 厚さ 0.74 (mm)

D マラムレッシュ地方 (図39, 40)

ギャザー方法ーインクレティツラ(Încrėtițură 図28)技法



図39 袖口部分

前、後身頃のヨーク縮め率 約2.40倍
 (出来上り寸法 20cm 用いた布48cm)
 カフス(くびれた部分) 縮め率 約3.17倍
 (出来上り寸法 23cm 用いた布73cm)
 袖山 縮め率 約2.43倍
 (出来上り寸法 30cm 用いた布73cm)



図40 前身頃

試料一用布	50cm(幅) 340cm
素材	木綿
材質	木綿100%
組織	平織り(手織り)
目付	340 (g/m ²)
密度	経17 緯15 (本/cm)
厚さ	0.65 (mm)

8 インクレティツラ技法は、独立したギャザー技法

インクレティツラはドロンワーク技法に似た緯(糸)を抜く作業をしたのち、その個所を規則的に掬ってランニングステッチをし、その糸を十分に引き締めて規則的な皺とギャザーを出すものである。シャーリングは、ランニングステッチをして、糸を引き締める方法は同じであるが糸の引き締めはインクレティツラに比べごく僅かで、構成したギャザーの形態はインクレティツラに比べ流動的である。裏スモッキングは、表側に縫い締め糸が出ないという点ではインクレティツラに多少似かよっているというものの、裏側を縦横、左右、斜めに掬って糸を引き締めることで縦にも縮む特性をもつ。

もう1つ大きく異なるのは布地の厚さである。シャーリングは薄地を用い、スモッキングは薄地、中厚地を用い、裏スモッキングは薄地、厚地のいずれにも可能である。

表1 ギャザー方法による襷の形態

材質 木綿 100%
組織 平織り

	布地の厚さ	糸	技 法	ステッチの方向	襷
シャーリング	薄地	布と同色	ランニングステッチ	不確定	なし
スモッキング	薄地、中厚地、	色糸	スモッキング	上下移動のある横移動	縦襷
裏スモッキング	薄地、中厚地、厚地	布と同色	裏からの掬い縫い	上下左右斜め	変形襷
インクレティツラ	厚地	布と同色	糸抜きをした後 ランニングステッチ	右からの横移動	変形縦襷

表2 地域におけるギャザー方法と縮め率

地 域	目付 g/m ²	密 度		厚 (mm)	ギャザー方法	身幅 (cm)	袖幅 (cm)	縮め率(倍率)			
		経	緯					前身頃	後身頃	袖山	袖口
シック村	274	18	20	0.6	セッティング・イン・ギャザーズ	138	80	2.42	2.42	2.66	4.44
メラ村	160	28	30	0.33	スモッキング (プリーツを含む)	174	160	5.37	22.2	20.0	7.11
ブコビナ地方	※1	14	13	0.74	ランニングステッチ	135	38	※2 3.3	※2 3.3	※2 3.3	—
マラムレッシュ地方	340	17	15	0.65	インクレティツラ	134	73	2.40	2.40	2.43	3.17

*1 刺繍が含まれ計測不可能

*2 装着時に糸を引き締めた状態でおよその寸法

測定器 厚さ ノギス、目付 天秤秤

密度 ルーベ(10倍)による

この結果からインクレティツラは布の厚さ、ステッチの方向、襷の形態などを総合的に比較すると、いずれの技法にも属さない、1つの技法と考えてよいのではないかと考える。

9 まとめ

ギャザーを用いたブラウスを布地で分けると、手織り厚地布を使用するシック村、ブコビナ地方、マラムレッシュ地方、それに対して機械織り薄地布(ここでの薄地布とはブロード程度のものをいう)を使用するのはメラ村である。

手織り布を使用する地域の織り幅はシック村が56cm、マラムレッシュ地方が50cm、ブコビナ地方が47cmである。

「表2 地域におけるギャザー方法と縮め率」から、織り幅の違いがあってもマチや切り替えなどを用いて、出来上り身幅は、シック村は138cm、マラムレッシュ地方は134cm、ブコビナ地方は135cmと、大きな差は見られない。

機械織りの薄地布を使用するメラ村の織り幅は90cm、出来上り身幅は174cmで、3地域に比べかなりゆとりを持ったものである。

これらの地域はブラウスを制作するために、個々の体形から身幅を割り出すことはなく、ゆとりをもたせた身幅は、おおかたの人、また多少の体形の変化にも対応できる寸法である。

次に布地の厚さを見ると、シック村は0.6mm、マラムレッシュ地方は0.65mm、ブコビナ地方は0.74mmで、シック村とマラムレッシュ地方がほぼ同厚だが、ブコビナ地方は、他の2地域に比べやや厚地になる。メラ村の厚さ(0.33mm)は、手織り布を用いる地域の約半分の薄さである。

ギャザーの縮め率は、手織り布の3地域のなかで、ブコビナ地方の縮め率は、着装時、個々に引き締めた時のおおよその縮め率約3.3倍、シック村とマラムレッシュ地方の縮め率をみると約2.4倍で同じである。機械織りのメラ村の縮め率は約5.37倍で手織り布の地域と比べ、十分なゆとりをプリーツで畳み込んである。これは薄地布でありながら厚みをつけたことになる。

以上のことから気候的な要素つまり厚地布またはギャザーやプリーツをとることで保温効果を持たせる必要性と、体形のサイズや変化に対応できる利便性が考えられる。

つぎにこれらの4地域に共通する点は、直線裁ちを用いていることである。そのため着装するには身幅のゆとりを必要とする。このゆとりを機能的にするために、ギャザーを用いて体形に添わす必要がある。その方法

として、シック村ではセッティング・イン・ギャザーズ技法、マラムレッシュ地方はインクレティツラ技法、ブコビナ地方はランニングステッチによる引き締め、メラ村はギャザーとスモッキング技法の併用したものをを用いている。

各地方のブラウスの形態を大きく特長づけているのは袖である。袖幅を見るとメラ村は160cm、シック村は80cm、マラムレッシュ地方は73cm、ブコビナ地方は38cmである。

ブコビナ地方を除いた3地域の袖幅に注目すると、マラムレッシュ地方では、袖山(2.43倍)、袖口(3.17倍)を縮めた73cmの袖幅を、厚地布を生かして自然に膨らませて着装する。同じ厚地布でも、シック村の場合は袖山(2.66倍)、袖口(4.44倍)を縮めた袖幅80cmのものを平らに(40cm)して、横にプリーツを畳み、それを膨らませて装着する。

この2点を比較すると、シック村のものはマラムレッシュ地方のものより7cmほど袖幅が広いとはいえ、目視では、横にプリーツを畳み膨らませた形態から、かなり大きく感じられる。

機械織りのメラ村の袖は、袖山(カラー付け位置)(20.0倍)、カフス付け位置(7.11倍)を縮めた160cmの袖幅は、制作後マッシュルームプリーツを畳み込むため、目視では普通袖幅のように感じる。

これらのブラウスはすべてギャザーまたはその変化したものをもとに、それぞれの刺繍技法をとり入れている。つまりシック村はセット・イン・ギャザーズと横プリーツ、マラムレッシュ地方はインクレティツラ技法とアイレット刺繍、ブコビナ地方はランニングステッチの引き締めと区限刺繍、メラ村はギャザーにスモッキングしたものにプリーツを併用し、そこにルーマニアンステッチを入れることで、それぞれの地域の特徴ある衣装としている。

またもう1つの疑問点であったマラムレッシュ地方のインクレティツラ技法は、「表1 ギャザー方法による襷の形態」より、布の厚さ、ステッチの方向、襷の形態などからいずれのギャザー技法にも属さない独自の技法として考えられる。

さいごに

かつてはハンガリー領でもあったトランシルバニア地方、ウクライナと国境を接するマラムレッシュ地方またウクライナとモルドバ共和国に国境を接するブコビナ地方、これらの地域はルーマニアの北寄りに位置しながら、それぞれに異なる衣装を用いていた。

これらの地域はなだらかな丘陵地帯でありながら、

冬には日中でも氷点下10～20度という厳しい寒冷の地である。雨水だけが頼りというシック村（2004年から週1回、限られた分量であるが水道水が使えるようになった）や、羊の放牧を生活の糧とするブコビナ地方の山間の村など上に取り上げた地域ないし村は、自給自足に近い生活で、農耕用の馬車を使って、近隣の町まで必要品を調えに行く。人々は素朴で突然の来訪者に対しても、大いにもてなしてくれる心の温かい人々であった。そして家々（村々）には、祖先から伝わる衣装や刺繍が大切に守られていた。

衣装の使い分けは特になく、結婚式、祭りのために新しいものを作る。それがしだいに古くなると日曜礼拝や葬儀に、そしてやがては普段着となる。例えば婚礼の花嫁はもとより参列する人々も同じ衣装ということである。

花嫁は頭に神聖な樅の葉と花を飾り、丈の短い白いベール（マラムレッシュ地方）を着ける。また数本の丈の長いリボンがついたビーズの頭飾り（メラ村）や、花飾りのある帽子（シック村）が、花嫁の証でもある。葬儀にも同じものを着るが、ブラウスの縁取りの色に地味なものを着るという。

しかしながら、家に代々伝わる衣装の起源や由来については、いずれの人からも、曾祖母は着ていたが、それ以前は分からないという。これは首都ブカレストを始めとした各地の博物館（記 参考博物館）にも多くの、その地域の衣装が収蔵されていたが、起源となると明快な答えは得られなかった。

夏季に大きな町（ブラショフ、シビウ、クルージュ・ナボカなど）に入ると、とくに日曜、祭日には（寒冷地である理由で夏季が多い）、集団結婚式かと思うほど、あちこちで結婚式姿をみかける。結婚式も従来のしきたりや民族衣装で行うより、町のレストランで行うことが流行ってきているという。しかもここで見られるのは、世界中どこにでもあるウエディングドレス姿や花をあしらった頭飾りを着けたスーツ姿である。

今回取り上げた地域は現在でも、祭り、結婚式、日曜礼拝などハレの日に着用されているのは確かなことである。

これは、すでに冒頭（p31左段下から3行より）でも述べたように、地理的環境によって周囲から取り残されたと言ってもよいほどの過疎の村だったからである。こうした村々は交通の手段が農耕用の馬車であるとか、水の多くは雨水が頼りであるとか、炊事や暖房には薪を利用する生活が、出稼ぎなどで近隣の国や首都ブカレストなどの利便性の高い暮らしぶりを見る機会が多くなるにつれて、便利な生活を願望し、変わって行ってもおかしくはない。

こうした傾向は他の国で辿って来たように、いずれこの国も便利な生活と引き換えに、特徴のないものになってしまうのではないかと、危惧するのは考え過ぎだろうか。

今回幸運にも出会ったお年寄りがお元気なうちに、少しでも伝統ある衣装や刺繍などを聞いておきたいと思っている。また今回調べきれなかった地方や村の衣装の歴史について調査することが今後に残された課題である。

最後にこの本文をまとめるにあたり宿泊ならびに衣装や刺繍について多くの方々から披露や解説をお願いした。また大切な曾祖母、祖母、ご自分の衣装をお譲りいただいたシック村のKlala Zsoldos氏、パドイゼイ村のPeterus Maria氏、ボテイザ村のSidău Ioana氏、メラ村のPalfi Eniko氏、また現地の情報ならびに、通訳、車の手配等をしていただいたルーマニア・ブカレスト在住の、Olivia Berghianu氏、ルーマニア国民観光省日本支店所長Alexandru Șerban氏の協力に感謝いたします。

また、ルーマニアの少数民族のエッセイストであり写真家でもある、みやこうせい氏には私が足で歩いて感じた疑問点に対して、長年の研究の成果を快く御披露いただいた。ここに厚く御礼申しあげます。

語釈（*印で表示）

*1 革製の靴

平らの牛革の周囲を細い革紐で個人の足に合わせて縫い締めて穿くオピンチ（opinci 図41）やブーツ、短靴なども穿く。



*2 コート

寒い時期の外出時に着けるもので、羊毛糸で織ったグバ（Bubă）、袖のないジャケット、ライバル（lăibăr）、袖のあるコート、レクリク（lecrik）などがある。

＊3 フラットステッチ (Flat Stitch)

平らに刺したものの総称で、輪郭線や空間を埋めるステッチのこと。

代表的な技法としてサテンステッチ (Satin Stitch)、アウトラインステッチ (Outline Stitch)、フェザーステッチ (Feather Stitch) などがある。

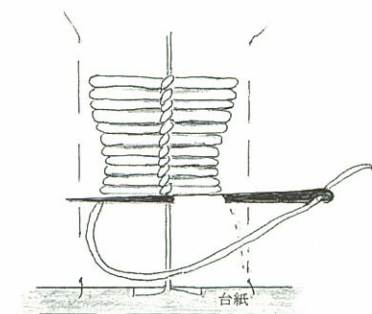
＊4 区限刺繍 (Counted Thread Stitch)

布目を数えながら刺すステッチで、キャンバスステッチ (Canvas Stitch) ともいう。

代表的なものにクロスステッチ (Cross Stitch) フローレンティンステッチ (Florentine Stitch)、フラットステッチ (Flat Stitch)、ファーンステッチ (Fern Stitch)、テントステッチ (Tent Stitch) などがある。

＊5 ルーマニアンステッチ (Rumanian Stitch)

ここでは布の接ぎに用いられている。まず双方の布端を折り曲げ、台紙 (奉書程度のもの) に固定し、ルーマニアンステッチして、双方の布の繋ぎとともに装飾を兼ねている。(図42)

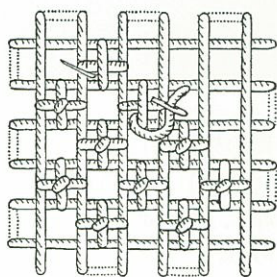


＊6 イラショシュ (Yrašos)

またはクローズド・スクエア・チェーンステッチ (Closed Square Chain Stitch) とも言う。ハンガリー刺繍技法の1つである。幅が広いオープン・チェーンステッチ (Open Chain Stitch) の間隔を狭めて刺したものである。

＊7 トロッコー・クロスステッチ (Torockó Cross Stitch)

註6 p 55より転写。トランシルバニア地方クルージュ・ナポカの西南に位置するトロッコー村の名がつけられた。図案の輪郭を取り、その内側を縦横に格子状に糸を渡し、その交差した個所を十字に止める技法である。(図43)



＊8 飾り布 ステルガル (Ștergar)

ルーマニア各地に見られるもので、教会や家庭の壁にイコンをはじめ家族の写真、飾り皿などの上から左右に垂らして飾るものである。形態は丈長で、両端はフリンジになっており、マクラメ結びやレース編みされている。横縞や幾何学模様、花模様を織り込んである。

＊9 オープンワーク・シーム (Openwork Seam)

接ぎ合わす布端を裏側に織り込み、クロード・ブランケット・ステッチ (Crossed Blanket Stitch) 等を用いて2枚の布を接ぎ合わす技法。双方が厚地布の場合に、縫い代が収まりよく接げる方法である。(図44)



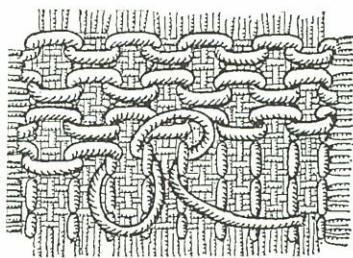
＊10 ビーズの頭飾り マルジュレ (Mărgele)

初めは未婚の人の頭飾りであったようだが現在は既婚した人でも若い人は着けている。(図45横側)、(図46前側)



*11 ロックステッチ (Lock Stitch)

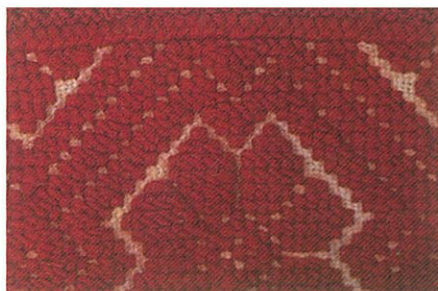
註6 p.54より転写。(図47)



ハンガリーの刺繍の1つで、ラップドステッチ (Wrapped Stitch) の1種である。ランニングステッチやバックステッチ (Running Stitch や Back Stitch) を施した糸を掬って、立体的な模様を作る方法である。

*12 ローズ・クロスステッチ (Rose-cross Stitch)

ラップドステッチの一種で、ロックステッチしたものを、さらに掬って、より立体的な模様にする技法である。(図48)



*13 ザディエ (Zadie)

スカートの分類になり、ウールまたは化繊で手織りした厚地のエプロン状のものである。ザディエは前後に各1枚着ける場合と、前の部分だけ1枚着ける場合がある。横縞に織られた色彩は、黒色を基調に赤や黄色、橙、緑、青などあり、その色の組み合わせは谷筋 (村) で分けられている。縞の太さで既婚者かどうかも判別できる。

*14 羊毛皮のベスト (Vestă) またはピエプタル (Pieptar)

当初、羊毛皮に羊革 (表側) で抽象的な花柄をアップリケしていたが、次第に図案化した花柄を毛糸で刺繍するようになる。そして黒色ベルベット地に花柄を毛糸刺繍したものを羊毛皮に合わせた形に移行してきた。この花柄は隣国ハンガリーの影響とみられる。

*15 アイレット刺繍 (Eyelet Embroidery)

ブロードリー・アングレーズ (Broderie Anglaise) ともいい、カットワーク (Cut Work) の1種である。白地に白糸 (ここでは、アブローダー糸12~16番程度のもの使用) を用いて、目打ちで小さな穴を開けながら、穴の周囲を巻きかがりする方法である。この技法のほかにサテンステッチ (Satin Stitch) やステムステッチ (Stem Stitch) の技法も、共に刺繍されることが多い。

後にマデラ島 (ポルトガル) に伝わり、マデラワーク (Madeira Work) とも言われる。

*16 ボーダー刺繍 (Border Stitch)

多色の糸を用いて、布の目または罫を拾い、バックステッチやダーニングステッチを用いて菱形や井桁模様を1~2cm幅のボーダー状に刺繍したものである。

*17 マクラメ糸

この地方 (マラムレッシュ) でいうマクラメ糸とは、白糸刺繍で用いるアブローダー16番程度の太さの糸を言う。(この糸でマクラメ編みすることはない)

註

- 註1 みやこうせい『マラムレッシュ』未知谷 (2000) p.192, pp.24—25, I—V
- 註2 A. E. カンテミール, C. D. ゼレティン『ルーマニア民族衣装集』光文社 (1975)
- 註3 田中千代『服飾辞典』婦人画報社 (1961) p.219
- 註4 田代文雄 特別企画『ハンガリーの刺繍と民族衣装』学習研究社 (昭和58年8月号) p.42
- 註5 パメラ・クラバーン『手芸百科事典』尾上恵美・田村義進訳、雄鶏社 (1978) p.40
- 註6 Edit, F. (1961). *Hungarian peasant embroidery*. London: Batsford, pp.54—55
- 註7 Therese, D.D. (1996). *The complete dmc encyclopedia of needle work*. London: Courage books. p.18, p.22
- 註8 Interweave Press (1990) *Anchor manual of needlework*. Colorado: Interweave Press. P.60
- 註9 Anne, A. (1990). *Smocking*. London: Merehurst. p.39

参考文献

- Tözegi, T. (2003) *A mérai kötény*. Cluj-napoca: Șorțul din Mera
- Tancred, B., & Gheorhe F., & Emilia I. (1957) *Port tesaturi cusaturi*. Sibiu: Pentru
- Mircea, M., & Tancred, B. (1980) *Rumänien*. Romania: Editura Sport-Turism

参考博物館

- Bucuresti 「Muzeul Național de Artă」
- Brașov 「Muzeul de Istorie」
- Cluj-napoca 「Muzeul de Istorie al Transilvaniei」
- Suceava 「Muzeul de Artă Populară」

参考衣装

トランシルバニア地方クルージュ県シック村

ブラウス (Cămașă) 20世紀中期

トランシルバニア地方クルージュ県メラ村

ブラウス (Cămașă Rotundă) 20世紀前期

ベスタ (Vestă) 20世紀中期

プリーツスカート (Fustă Plisată) 20世紀中期

エプロン (Șorț Plisată) 20世紀中期

スカーフ (Șal de Lână) 20世紀後期

マラムレッシュ地方

ブラウス (Cămașă) 20世紀中期

エプロン、スカート (Zadie) 20世紀前～中期

スカーフ (Șal de Lână) 20世紀中期

ブコビナ地方

ブラウス (Cămașă) 20世紀前期

スカート (Catrință) 20世紀前期

ベルト (Brâu) 20世紀中期

本文中に記載したシック村、マラムレッシュ地方の衣装は筆者所蔵品、メラ村、ブコビナ地方の衣装は本大学・衣裳博物館の所蔵品を、許可を得て筆者が撮影した。

